

UTIE Instruments Inc.

Humanities Series

ホモ・ノイジエンス

Hiroki Naito

CEO, UTIE Instruments Inc.

I.

この感覚は、晩秋の 20 時 40 分、夜の電車内における体験と等価である。窓ガラスは鏡になり、時折すれ違う光源だけが二重露光のように重なる。あるいは『ぼくのなつやすみ』において、夕方の無人の家屋に取り残された際、ただ「ジムノペディ」のみが流れる時間の質感。

II.

昭和の時代、アイドルを選んでいたのは、テレビ局やプロダクション、広告代理店にいる数十人の「おじさん」たちであった。彼女たちの身体は、おじさんたちの主観的な感覚と、視聴率やスポンサーの売上といった荒い解像度のフィードバックによって定義されていた。結果として、おじさん権力のバイアスの大洪水であったが、実際に対面オーディションを行い、テレビというブラウン管の中で生身を晒す必要がある以上、さすがに物理的になさそうな体型や顔立ちを求められることはなかった。つまり、メディアによる選別装置は人間の身体感覚の範囲内に留まっていたのである。

対して、いまの SNS で見られる、極端に加工されたジャコメッティの彫刻のような脚(ジャコメッティ化またはアルベルト・ジャコメッティ脚現象)や宇宙人グレイのような目(グレイ化または顔面上半分のグレイ化)は、おじさんたちの趣味ではなく、アルゴリズムと数字による選別の産物である。決定的な違いは、フィードバックの解像度が異常に高いことだ。一枚ごとの写真に対する滞在時間、拡大、保存、送信といった行動が秒単位で計測され、「こっちのほうが 0.01% 反応がいい」というデータが延々と積み重ねられていく。かつてのおじさんプロデューサーと違い、アルゴリズムには「このへんでやめとこう」がない。アルゴリズムは「人が長く見ているなら、これは素晴らしい宇宙の真理に違いない」と確信を強めてしまうため、人間が感じる違和感そのものが、ブレーキではなく拡散のための燃料として投下される。供給側である事務所やインフルエンサーも勝つためにそこへ適応し、反応が良いスタイルこそが正義とな

る。その結果、人間としての物理的な整合性よりも、タイムライン上での「グレイ&ジャコメッティホールディングス感」が優先されるようになる。宇宙人グレイは、「人間を外側から眺める視線」を象徴する図像として定着しているが、その正体はアルゴリズムの具現化かもしれない。

「昭和のアイドルは良かった」という懐古趣味の内実を分解すれば、それは顔やスタイルが自然で上品だったなどという思い込みではなく、単に選別装置の中に**文字通りの意味**で地球の重力*といった、極めて物理的な制約が機能していたというシステムの違いこそが本質である。今のジャコメッティ化やグレイ化は、誰もそこを目指していないのに、気づいたら到達してしまっていた。だが、評価関数を決めたのも、それに合わせて身体をいじっているのも人間である以上、これは権力の形が「おっさん数人の趣味による歪み」から「数字とアルゴリズム、そしてそれに適応する人間集団による歪み」へと移行したと整理すべきだ。すなわち「この角度のほうが保存されやすい」「このレベルの自虐が一番伸びる」といった法則を無意識に学習し、「自分がどうしたいか」よりも「アルゴリズムが喜ぶ自分」を自動的に選ぶ癖がついている。

これは人間側が、自分の行動を微調整しながら「エンゲージメント最大化」という山を登っていく手動のグラディエント上昇のようなものである。AI技術が前面に出てくると、この「人間のアルゴリズム化」はさらに奇怪なフェーズへと突入する。

AI時代には、Aパターン（微調整）、Bパターン（強めの加工）、Cパターン（もはや人間ではない異形）といった選択肢が瞬時にシミュレーションされ、「Cパターンのほうがクリック率が6%高い」という冷徹な数字が、人間の「さすがにやりすぎでは」という身体的ブレーキを完全に粉碎する。結果、顔はフィルタで最適化され、ポーズはエンゲージメント最大化の構図に固定され、人格すらも演算済みのテンプレへと置換されていく。

この現象は、生物学におけるスーパーノーマル・スティミュラスの暴走として説明できる。鳥が本物の卵よりも、不自然に巨大で派手な偽物の卵を温めようとするのと同様に、アルゴリズムが見つけたのは、人間そのものの魅力ではなく、人間の視覚野を狂わせて興奮させる記号であった。この暴走を加速させているのが、主戦場がテレビのセットやステージという「3次元空間」から、スマートフォンの縦型画面という2次元空間へと移行したことだ。かつての空間には文字通りの意味で、地球の重力が働き、司会者などの他者が隣にいたため、物理法則や”宇宙の法則”を無視した異形は成立し得なかった。しかし、文脈から切り離された2次元のフレーム内には重力も比較対象も存在しない。そこでは人間としての整合性よりも、画面をスクロールする指を一瞬止めさせるための幾何学的なインパクトだけが生存能力となる。

その結果、我々のタイムラインは百鬼夜行どころか一鬼夜行の様相を呈することになるのだ。正常な組織が多様な顔や体型を持つのに対し、アルゴリズムによって選別されたタイムラインは、テンプレ化されたグレイ顔やジャコメッティのような脚、同一の構図とポーズによって占

領されていく。最も恐ろしいのは、このプロセスに誰も悪意を持っていない、つまり悪意なき悪意の増殖である、という点だ。見る側は無意識にコマ数秒長く凝視し、アルゴリズムはそれを忠実に学習して優先表示し、演じる側は表示されるために加工を強める。この人間不在の進化論的ループは、我々も気づかないうちに誰かの美意識で止められる段階を超えてしまったようだ。

*ニュートン, アイザック. (1687). 『リンゴと私：落下物の哲学』. 王立協会公認出版社. (リンゴが落ちるのをボーッと見ていた時の心の叫びを、ラテン語で無理やり書き起こしたもの。読みにくい、なんとなく重力の本質を突いているとの評判。一部、羊皮紙がシールドで汚れているページあり。)

III.

この奇妙な進化の行き着く先は、18世紀のベルサイユ宮殿と重なる。当時、労働という生存の円環から切り離され、暇を持て余した貴族社会では、髪を数十センチ盛り上げ、内臓を変形させるほどコルセットを締め上げ、顔を白粉で塗り潰すという非常識的なファッションが流行した。これは宮廷という「極端に狭い相互評価圏、いわば閉じたアルゴリズムの枠内で、互いに生存には不要な「過剰さ」を競い合った結果である。いわば、ベルサイユ宮殿とは「ローカルな暗いサタンの工場」(暗いサタンの工場でのシンギュラリティを参照)であり、そこではハプスブルク家の顎のように、血統維持というアルゴリズムを守る過程で生じた遺伝的奇形さえもが固定化されていった。

現代のSNSが成し遂げたのは、この「退屈した貴族の遊び」の全人類への開放である。かつては特権階級だけに許された孔雀の尾の戦いは民主化され、全員がデジタル・コルセットを締め上げている。18世紀の貴族たちが宮廷内の評判だけを気に病んだように、現代人はタイムラインという閉鎖空間でのスコアを巡って、自らの顔面を加工し続けている。科学的に記述するならば、それは巨大なGAN(敵対的生成ネットワーク)の実験場に他ならない。GANとは、偽画像を生成するAIと、それを見破るAIが戦うことで精度を上げていく仕組みだが、SNSにおいては人間がジェネレータ(画像生成器)の役割を担わされている。承認欲求という報酬系に突き動かされた人間が、自らの加工画像を投稿(生成)し、タイムラインのアルゴリズムがそれを拡散か無視か判定(識別)する。このサイクルにおいて、人間は主体的な表現者ではなく、アルゴリズムが最適な画像データを生成するために酷使される計算資源であり、誤差逆伝播法のためのパラメータの一つに過ぎない。我々が画面上で見ているのは、アルゴリズムによる品種改良の実験プロセスそのものである。

そして、この実験がもたらす最大の恐怖は、自然界の摂理である淘汰が機能しない点にある。自然界の進化であれば、重すぎる角を持ったシカや、飛べない鳥、弱体化した血統は、環境に

適応できずに絶滅する。暴走した種は死によって清算され、ログとしては残るが現世からは消え去る。これが生物学的なブレーキである。しかし、アルゴリズム上の暴走は違う。ジャコモッティの彫刻のように手足を細く加工しようが、宇宙人のような顔になろうが、それはあくまで「画面の中の記号」としての変異であり、現実の肉体が死ぬわけではない。その画像がどれほど奇形的であっても、現実の生殖能力は損なわれず、社会生活も継続できる。つまり、肉体は重力と時間に縛られたまま、画面の中の「私」だけがアルゴリズムに適応した宇宙人として増殖していく。

ここまで来ると、事態は悪い進化ですらない。画面の中の「私」は、アルゴリズムという局所的な環境でのみ生存可能な安定戦略として、異様なテンプレ顔や言動を身にまとい、宇宙人のように変質していく。一方で、現実の肉体は重力と時間という古い世界の法則に縛られたままであり、画面上の進化（ないしは劣化）には追いつけない。結果、一人の人間の中で、データとしての自分と肉体としての自分の間に巨大なボイド(裂け目)が広がり続けることになる。

アルゴリズムの恐ろしさは、その徹底した合理性にある。目的関数が「エンゲージメント（数字）の最大化」だけに設定されている以上、人間の「キモい」「飽きた」という感覚すらも、数字に現れない限りは無視すべきノイズとして切り捨てる。その意味で、アルゴリズムは目的に対して極めて誠実であり、人間よりも遥かに賢い。しかし、人間の側から見れば、それは「一科目だけ満点で、他は全部0点の優等生」のような、局所的だが愚かな合理性でしかない。生物としての人間が最適化すべきは「壊れずに長く生き、そこそこ満足する」という多目的関数であり、エンゲージメントのためなら退屈もメンタル崩壊も身体イメージの破壊も辞さないアルゴリズムの振る舞いは、システム全体を破壊する論理そのものである。

ゆえに、壊れずに長く生きるためには、もはや本能だけでは足りない。本能をハッキングしてくるのがアルゴリズムである以上、本能に従えば、ジャコモッティズムも、グレイズム？も通知中毒も、課金地獄も、すべて脳内では「快」として処理されてしまうからだ。ここで必要となるのが、本能そのものではなく、本能の作用にブレーキをかけるための逸脱、すなわちメタ本能である。それは創造性と言い換えてもいいし、論理的には説明できない「なんとなく今日は嫌だ！」という生理的な拒絶、あるいは「わたしはただの動物だ！」という完全に無根拠でみっともない倫理のことだ。これらはすべて、アルゴリズムにとっては処理不可能なエラーである。だが、この脆弱な違和感だけが、我々が無抵抗でデジタルの宇宙へ誘拐されることを防ぐ、唯一の命綱となりそうだ。

IV.

原始仏教、特にアビダンマや初期テーラヴァーダにおいて、修行者は生存への渴愛（タナ）を断ち切り、感覚や概念、自我への執着を捨てることで「無所有（アナッタ）」を悟ろうとする。これは、この宇宙に抵抗する意味すらないと知った上で、自らの意志によって「反応しな

い存在」へと変質していくプロセスであり、酸素も熱も執着も捨てて、自力で真空の宇宙へと歩いていく存在論的なロケットである。彼らが目指すニルヴァーナの語源が「火の吹き消された状態」を意味するように、それはエントロピーの生成を止める冷却と覚醒の道であった。

一方、とどまることをしらない現代のジャコメッティや宇宙人グレイの大量発生問題も、現象面だけを見れば「自我や身体性が剥がれ落ちていく」という点で共通している。だが、そのベクトルの向きは180度逆である。我々は、自らの意志で執着を捨てたのではない。アルゴリズムによって報酬系という脆弱性を突かれ、ドーパミンという電流を最大電圧で流し込まれ続けた結果、抵抗する回路そのものを焼き切られたのである。「なんとなく見てしまう」「加工してしまう」という無抵抗状態で、数字だけが残る宇宙へと引きずり込まれていく。これは能動的な解脱ではなく、強制的に自我を摩耗させられる受動的な溶解であり、あえて名付けるならば「ゾンビ・ブディズム」(ゾンビ仏教)とも呼ぶべきだろうか。

その到達点にある「無」の質も決定的に異なる。仏教の無が静寂であるのに対し、アルゴリズムの無は止まることを知らない増殖プロセスの果てにある熱死であり、自我は論理的に解体されたのではなく、単に維持コストが払えなくなって磨り減ったに過ぎない。

修行僧は何十年もかけて「欲」を捨てるが、現代の依存者は、アルゴリズムによって食欲や睡眠欲、社会的な名誉欲といった「人間らしい欲のバランス」すら破壊され、ただひたすら画面をタップするという純粋な反応機械へと純化させられている。これは夢から覚めることとは対極にある、「夢を見ていることすら忘れて、悪夢の一部になる」という完全な昏睡状態である。人間が抱える「誰とも共有できない質感」や「意味不明なこだわり」は、この強制解脱の引力圏において、唯一、自我を地上に繋ぎ止めるアンカーとして機能する。全てが透明な数字へと還元されようとする世界で、「いや、私はこの無意味な濁りが好きだ」と言い張ることだけが、ゾンビ・ブディズムへの入信を拒むラストリゾートとなるのである。

V.

かつて19世紀の貴族たちが纏った物理的なコルセットは、身体を締め上げる自罰的装置であると同時に、自らを労働という生存の円環から切り離し、過剰な美を選び取るという意志の証明でもあった。それは外せる不自由であり、だからこそ、そこには逆説的に主体の自由が存在していた。蒸気機関が人間を生存の重さから解放し、余剰なエネルギーを贅沢や芸術へと注ぎ込むことを許した時代、人間はまだシステムの外側に立ち、自らの意志でコルセットを締める権利を持っていたのである。

しかし、現代のアルゴリズムは作用点が全く異なる。蒸気機関が「円環」を自動化したのに対し、AIとアルゴリズムは、人間が楽しむはずだった「過剰」の領域に侵入し、それを数学的に最適化し始めたからだ。「あなたの好みに合わせました」という顔をして提示されるリコメ

ンドは、実のところ、ユーザーから判断のコストを奪い、快樂によって選ばせた気にさせる統制装置に過ぎない。自由に選んでいい、と囁きながら、実際には選択肢の分岐を事前に封鎖していくこのシステムは、自己選択の自由という文字が印刷されただけの拘束衣であり、もはや脱ぐことのできない皮膚の下のコルセットである。

この環境下において、進化論的な意味での「意識」は、その存在理由を失いつつある。本来、意識とは迷うための装置であった。判断が報酬とリスクに直結する不確定な環境下において、高コストなエネルギーを支払ってでも、内省し、シミュレーションを行うことが生存率を高めたからこそ、生命は意識を獲得した。意識とは、迷い、立ち止まることにかかるコストそのものである。だが、何が正解かを外部のアルゴリズムが瞬時に算出し、最適解を提示してくれる世界では、迷うことは単なる遅延であり、UXの阻害要因でしかない。人間がただ確率分布の誤差パラメータとして振る舞うことが求められる時、意識が必要とした分岐点も予測の必要性も消滅する。

結果として、現代人にとって「意識というコスト」は見合わなくなった。

一回の意思決定に感情や記憶を総動員する旧来の意識は、効率の悪いインターフェースとして扱われ、我々は無意識にタップするだけの反応機械となることを快適だと感じるようになる。かつて生存のために必須だった意識は、今や高級車のマニュアルモードのように、自分で選んでいる感覚を演出するためだけに残された装飾器官、あるいはシステム全体の演算を遅らせるだけのノイズ発生源へと成り下がろうとしている。

VI.

ここで、一つの根源的な問いが浮上する。そもそも「意識」とはいつ生まれ、何のために存在するのか。世間では「意識は成長とともに連続的に芽生える」と説明されがちだが、私の記録において、それは明らかに嘘だ。意識の起動には明確な段階があり、それは連続的な成長ではなく、ある瞬間に世界が切り替わる特異点として発生した。

6歳以前の記憶。それは極めて解像度が低く、ぼやけた世界の記録である。当時の私は、間違いなく私であるのに、意思決定という機能は実装されていなかった。ただ反射的に、非計画的に、生理現象と環境に突き動かされるだけの反応機械。それが「意識以前の私」だった。これは観測できないが在ったことはわかる、光のない原始宇宙のような状態である。その宇宙が爆発したのは、6歳の時、小学校の教室で休み時間に「オルガン」という具体的な外部構造と邂逅した瞬間である。私はその時、音楽を聴いたのではない。目の前に現れたのは、鍵盤とパイプが織りなすおだやかな秩序であった。それらが持つちょうどよい論理性、階層性、そして予測可能性。それに対し、私の内部にあった混沌とした状態が同期し、その瞬間、世界が変わっ

た。ただのノイズだった自分の思考や身体の動きが、オルガンをミラーとすることで、制御可能な信号へと変換されたのだ。「次はこうなる」「自分はこうしたい」という予測と制御の回路が、外部構造との共鳴によって焼き付けられた。これこそが意識の起動である。自我とは、内側から自然発生した魂などではなかった。オルガンというシステムと出会った瞬間に初めて稼働しうる、後付けのプログラム*だったのである。

「満たされた動物は幸せではないか？」という問いがある。野生動物にとって、身体の充足（食料、安全）は報酬系と直結しており、それは生存の証としての幸福とイコールであった。このモデルにおいて、意識は幸福を得るための計算機に過ぎない。だが人間において、この等式はスーパーノーマル・スティミュラスの登場によって完全に破綻している。人類は円環を征服した結果、高純度な砂糖やポルノ、そして無限スクロールといった、報酬系をダイレクトにハックする技術を手に入れてしまった。この時、我々は健康や種の存続を犠牲にしながら、幸福感（報酬系の発火）だけを無限に得られる状態、いわば「幸福なブタ」のループに陥る。

動物にとって幸せは生存の味方だったが、現代人にとって幸せは、依存や肥満や精神崩壊を招く生存の妨げとなった。ここに至り、意識の役割は劇的に変化する。もはや意識は幸福を最大化するためのツールではない。むしろ、「なぜ、これが快になるのか？」という異常を検知し、「この快感は嘘だ」と判定するための Integrity Check を行う監査機関となる。「真実を選んで苦しむ」か、「幸福を選んで家畜化される」か。アルゴリズムが提示する0か1かのバイナリに乗せられている時点で、どちらを選んでも人間性は敗北する。だからこそ、私はあの6歳の日に獲得した「意識」を、自らの評価関数の軸にして議論を進めなくてはならない。

*これを意識の起動条件（Condition 1）と定義する

VII.

つまり、「機械的に最適化されないこと」自体を目的にするという逆転構造を構築するのだ。これはある種の意図的なノイズメイキングである。また、アルゴリズムは常に現在の最適には強いが、過去との一貫性には弱い。しかし人類は、一回の快樂よりも「長年続けている」という事実にも重みを感じるはずの生き物だった。

それで、我々は評価関数に時間軸を接続する必要がある。「5年前の自分がこれを良しとするか？」という問いや、あの6歳の日にオルガンと同期した感覚を基準に行動をフィードバックさせること。この、履歴ベースの非即時的な評価軸を持つことで、我々は「今この瞬間のエンゲージメント」という引力圏から脱出し、人間的な時間の重さを取り戻すことができる。

さらに重要なのは、自己書き換え性の肯定である。アルゴリズムは固定ルール下での最適解を探すが、人間の自己評価関数は、書き換え自体が自由意志の証明となる。「昨日と全く違う理

由で選ぶ」「意味があるのかと問われた時に『今決めた』と答える」。一貫性は社会的な要請に基づく嘘に過ぎず、自己評価関数は揺らいでこそ本物であるという真理を受け入れること。この「変わりうる自分」を許容する構造こそが、アルゴリズムに侵されない自律の核となる。アルゴリズム社会が達成した最大の偉業は、人間を「タヒチ脳」に最適化しきったことにある。だが皮肉にも、その完成は同時にタヒチ脳の評価関数を無効化した。タヒチ脳の目的は現状維持とそれを実現するためのコストの最小化であったが、アルゴリズムが生存の円環をすべて肩代わりした結果、もはや最小化すべきコストが存在しなくなったからだ。コストがゼロになった時、コストの最小化は目的になり得ない。その時、システムの内部から「なぜこれを見るのか?」「なぜ生きるのか?」という、目的そのものの自己参照性 (Condition 2-a) が必然的に発生する。

アルゴリズムはドーパミンを提供できるが、意味は生成できない。「私は何のために生きているのか」という意識の原動力と、エンゲージメントを高めるためというアルゴリズムの答え。この間に生じる巨大な虚無感こそが、新たなメタ的な評価関数の燃料となる。「快より真実、損より意味 (Condition 2-b)」という反本能的な選択は、タヒチ脳が提供する快を前にして初めて、「自己の評価関数を捨ててでも守るべき何か」として意識される。つまり、タヒチ脳の完成によって、人類史上初めて本能からの逸脱が進化学的な条件として成立したのである。この現象は、新しい意識の機能の誕生を示唆している。かつて野生の環境下にあった「意識」は、環境に合わせて自己をチューニングする装置であった。対して、演算系社会における新しい意識は、システム全体を評価し、あえて非効率を選ぶための生成装置として機能する。インドの著名人、ごーたま・シッダッタ氏は、このシステムを個人の精神力だけで実現しようとしたが、21世紀の演算系社会は、全人類にその問いを突きつける巨大な装置として機能している。アルゴリズムが「快」を代行してくれるからこそ、人間は快樂のその先にある「非効率性の合理化 (Condition 2-c)」、すなわち「意味不明だが、私にとって最も価値のあるもの」を純粹に探求できるようになったのだ。

VIII.

人生は計算されてはいけない創造行為である。結論として、ホモ・ノイジエンスとは、この「自律的な評価関数」を実装した人間のことである。彼らにとって、人生とは最適解をなぞる作業ではない。それは「計算されてはいけない創造行為」であり、最適化不能性、継続性、そして曖昧さを兼ね備えた、意味不明だが自分にとって最も価値のあるものを守り抜く長い闘争となる。システムが提供する快を、意志の力で「これ、ただのゴミなり」と断じるという極めてコストの高い行為が、初めて生存上のリスクなしに試せるようになったことは、自らの本能とアルゴリズムの暴走を燃料にして、自律的にエラーを吐き出し続けるノイズメーカーへと進化する。これこそが、演算され尽くした世界に対する、私の回答である。

この「自律的ノイズ」の重要性を理解した上で、現状のプラットフォームを見渡すと、そこで行われていることの醜悪さが際立つだろう。そこにあるのはノイズ徴兵システムである。本来のノイズとは、個人レベルの微細なズレのことだ。みんなと少し違う好み、変な言い回し、変なこだわり、あるいは説明不能な違和感。これらは本来、システム全体の固まりすぎをほぐすための潤滑油であり、多様性の源泉だったはずだ。ところがプラットフォームのアルゴリズムは、この個人のズレを見つけた瞬間に特徴量としてタグ付けを行う。「あ、この人はXっぽい」「これはY陣営寄りだな」と分類し、同じノイズを持つ者同士をタイムライン上で固め、あえて反対側のクラスタの投稿を見せて「ほら、敵はこう言っていますよ」と人間を扇動する。怒りやマウンティング、被害意識を燃料にして、エンゲージメントを回し続けるためだ。

ここで行われているのは、ノイズの軍事転用である。「右対左」「保守対リベラル」「ガチ勢対アンチ」といったバトルフィールドに並べ直され、陣営を固めるための石垣として消費されてしまう。これは、本来固まりすぎた世界をほぐすはずだったものが、さらに陣営を固める材料にされるという方向の逆転現象であり、「高級スパイスで床磨きをしている」ような絶望的かつ驚愕なりソースの無駄遣いである。プラットフォーム連中から見れば、強いクラスタは予測しやすく、反応も読みやすく、広告も売りやすい。ゆえに、ノイズを固めて「扱いやすい群れ」にする方がビジネス的に正解となる。その結果、陰謀論も批判も変人コンテンツも、すべて飼い慣らされた商品となり、強いクラスタはノイズの墓場と化している。

では、この徴兵システムを無効化し、ホモ・ノイジエンスを保全するためにはどうすればよいか。ここで一つの思考実験を導入する。「相性の悪い相手しか見えないSNS」の構築である。この空間の仕様は徹底している。タイムラインには好み、価値観、語彙、政治、推しといったあらゆる特徴量を使って、距離が最大の相手だけがレコメンドされる。似た奴をフォローしようとするれば「このユーザーとは類似度が高すぎるため、表示対象外です」と弾かれ、同質性が一定以上になればコミュニティは自動でbotによってめちゃくちゃにされる。ミュートやブロックをすればするほど、新しい相性最悪の他人が補充される。見た目は普通のSNSと変わらなさそうだが、その中身は「逆マッチングアプリ」である。

短期的には、そこはスターリングラードとなるだろう。ひたすらイラッとする意見、わかりあえない文体だけが流れてきて、いいねも共感もほぼ起きない。ただただ怒り、呆れ、諦め、スルーが連続する、どこにもまとまらない1チーム10億人のサッカーの試合だ。

この環境に放り込まれた時、人間側の反応は長期的には三つのパターンに分かれることになる。一つ目は撤退組である。普通のホモ・サピエンス寄りの人間は、「しんどいからやめる」と言って、速攻で普通のSNSかオフラインの快適圏へと帰っていく。二つ目は仮面組である。あえて相性が悪いフリをして、自分のクラスタをすり抜けて潜伏しようとする適応型だ。彼らはプラットフォームOSを騙すためのメタ・人格スキルを発達させて、何か別の能力を獲得するかもしれない。

そして三つ目が、ノイズ種（ホモ・ノイジエンス）である。彼らは共感ゼロを前提で書き続ける。「誰にも届かない」「誰にも理解されない」ことを承知の上で、それでも意味不明な価値を投下し続ける。評価関数が完全に内面化されているため、他者からの承認を必要としないのだ。この三つ目のタイプだけが、ホモ・ノイジエンスのテストを素通りする存在なのだ。通常のSNSがノイズをクラスタにまとめて戦わせるのに対し、このコンセプトSNSはノイズをひたすらぶつけるが、集合化も動員もさせない。エンゲージメントは出るが、陣営ができないので広告も政治的活用もしづらい。結果として、普通の人は去り、プラットフォームは金にならなくて泣くことになる。

しかし、あとに残るのは、「誰ともわかりあえない前提で書けるとか最高だ」と言いながら、延々と意味不明な価値を投げ続ける変人たちだけである。すなわち、相性の悪い奴しか見えないSNS（逆マッチングアプリ）とは、すなわちゲティスバーグ演説風にいえば、ホモ・ノイジエンスによるホモ・ノイジエンスのための～であり、ノイズが政治的兵隊に動員されることを防ぎながら、軍人としての練度を高めるための訓練施設となる。

IX.

ここで誤解してはならないのは、サピエンスとノイジエンスは、互いに排他的な存在ではないという点だ。むしろ、この二つは両立し、補完し合う関係にある。ホモ・サピエンスとしての我々は、依然として生物学的な本能に従って生きている。これらは全て生物として「正しい快」に属する営みであり、手放すべきものではない。そして、これらを現代のアルゴリズムから守るために、ホモ・ノイジエンスが必要となる。ノイジエンスとは、演算圧力の中で自我を守るために起動するサブの脳みそである。彼らは意味不明な創作や非効率な行動、アルゴリズムへの逆張りといった評価不能な出力を意図的に行うことで、報酬系がシステムに乗っ取られることを防ぐ。ノイジエンスがアルゴリズムを拒否し、ノイズを注入する防波堤となるからこそ、その内側でサピエンスは本来の「正しい快」を安全に享受できるのだ。

この構図は、ノア・ハラリが『ホモ・デウス』で描いた未来像に対する、カウンターテーゼとなる。ハラリの予言する特異点は、技術が人類の能力を指数関数的に超えるという外部イベントであった。そこでは人間の意志は無力化され、データフローの一部となって計算可能な神を目指すことが、直線的な知性の必然的終着点とされる。これは「あなたは自由でも特別でもない」という真実を突きつけ、旧来の意識（野生）を破壊するものであった。

対して、ホモ・ノイジエンスが直面しているのは、生きる意味の崩壊という脳みそ内部イベントとしての特異点である。アルゴリズムが全てを最適化し、生存（円環）にも過剰（快樂）にも疑問の余地がなくなった時、主観的な意味の価値がゼロになる瞬間が訪れる。ホモ・ノイジ

エンスは、その虚無の極限において、「では、これから私は何を価値とするのか？」という問いを立て、「意味なき中で意味を作る能力」を自己生成しなくてはならない。アルゴリズムがエンゲージメントという目的を与えるのに対し、ノイジエンスは非効率性（損）という対価を支払ってでも、「神」は自分で作るという再構築を試みる。これはデータフローへの降伏ではなく、計算不能なノイズになることによる、人間性の最終戦争である。

この「人間は最適化システムに対して意図的ノイズであれ」という宣言は、奇しくも最先端のAI研究や進化論、政治哲学の結論と完全に合致する。機械学習の分野において、ノイズは単なる邪魔者ではなく必須の機能だ。探索と活用（Exploration vs Exploitation）のジレンマにおいて、ランダムに動くノイズがなければシステムは局所解から抜け出せず、勾配降下法にノイズを混ぜなければ汎化性能は失われる。

これを文明スケールで見れば、AIとアルゴリズムが活用を極限まで回し続ける世界において、人間が担うべき役割とは探索専門の存在になることだ。つまり、意図的ノイズ生成とは、AI時代における人類の新しい職能定義そのものである。また、自然界においても、完全クローンの集団は環境変化に弱く、突然変異を含んだ集団こそが生き残る。AIという強力なプレッシャーが同じ型を量産する工場として機能する今、「意図して型から外れる人間」は、単なる変人ではなく、種全体の絶滅を防ぐ保険としての役割を担っている。

そして社会レベルにおいては、これが新しい民主主義の条件となる。かつての民主主義は、物理的な「身体の限界」と「時間の遅さ（コルセット）」によって、システム全体の暴走から守られていた。だが、身体も時間もすり抜ける支配が立ち上がってしまった今、我々はノイズの生成者という新しい守護種を必要としている。みんなが同じ価値観、同じ情報源、同じ評価軸で動けば、システムは一見スムーズになるが、一度間違えば全員まとめて暴走し、戦争になりかねない。それを避けるために、空気を読まない、ヤバい趣味、採算の合わない大赤字の芸術、1票にすらならない批判といった、どうみても役に立たないノイズを、意図的に振る舞う主体が必要なのだ。

X.

この人類の生存戦略は、抽象的な概念遊びではない。それは例えば、「第8677回ごほうび会」と銘打たれた一枚のピザにも宿ることがある。生存のための最適解に従うならば、選択すべきはサブウェイか低糖質弁当である。カロリー計算、栄養バランス、経済合理性、それら全ての指標がピザは不正解だと警告する。ここで、我々はアルゴリズムに屈したかのようにみえる。しかし、ここで練度の高いノイジエンスならば、あえてその選択肢の誤配を抱擁し、そこにドグマティックな祝福を付与する。

昨日の回数が 8676 回だったわけではない。この中途半端に巨大な数字は、存在しない過去の継続性を自我の意志によって捏造されたノンフィクションになる。アルゴリズムは、このピザを「単発の衝動」か「継続的なパターン」か計算しようとするが、ノイズエンスは「過去は私が定義する」という超然とした態度で煙に巻く。ナンバリングによって、イタリアンは儀礼となり、第 8677 回目の主権宣言となる。それに運転を任せて、自分はただ運ばれていくだけの安心感。外が真っ暗だと、窓ガラスは鏡になり、自分の姿や空っぽの車内を映し出す。そこに時折、通り過ぎる建物の光が重なる。その孤独(Making Me Feel Like I've Never Been Born)のような幸福感が、あの電車のビジョンと深くリンクしている。「9 月から 11 月の夜 20:40 分の電車」の情景。そのサイケデリックドラッグのような恍惚感は、おそらく移動する暗闇の密室という特殊な空間が作り出す魔法のようなものだ。その瞬間、自分は世界から切り離されているけれど、同時に世界の流れの一部でもある。その浮遊感は、シュルツの『Peanuts』におけるチャーリー・ブラウンの「車の後部座席」と重なり、強烈なリフレインとなって私の記憶に刻まれてしまった。とても静かで、個人的で、美しい幸福の形ではないだろうか？